藻類 Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 69: 1–9, March 10, 2021

原著論文

江戸後期の辞書『永代節用無尽蔵』における藻類の和名と漢名

仲田 崇志

横浜国立大学大学院環境情報研究院（〒 240-8501 神奈川県横浜市保土ケ谷区常盤台 79-7）

Takashi Nakada: Japanese and kanji names found in a dictionary, *Eitai Setsuyo Mujinzo* (*Inexhaustible Eternal Word Collection for Everyday Use*), published in the early 19th century. Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 69: 1–9, March 10, 2021

Eitai Setsuyo Mujinzo (*Inexhaustible Eternal Word Collection for Everyday Use*) was one of the most common Japanese-Kanji-word dictionary in the 19th century. In this study, words related to algae and their kanji names were surveyed throughout the food-and-clothes and plant divisions of the *Tenpo 2* (1831) edition of the dictionary. Sixty-six words (10 from food-and-clothes and 56 from plant divisions) including 49 algal names (one from food-and-clothes and 48 from plant divisions) were recognized and compared with currently used Japanese and Latin names. Most of the Japanese and kanji names were comparable to currently used algal names, but a few kanji names were inconsistent with current usages. The vocabulary of the dictionary was also compared with that of one century-old and four current Japanese dictionaries. These results should contribute to understanding the common knowledge on algae among Japanese intellectuals in the late Edo period.

Key Index Words: classics, dictionary, Edo period, Japanese names, kanji names, Setsuyo-shu, vocabulary

Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University, 79-7 Tokiwadai, Hodogaya, Yokohama, Kanagawa 240-8501, Japan

Contact information: nakada-takashi-jk@ynu.ac.jp

緒言

現在，多くの日本産海藻類に和名と漢字名が充てられている（田中・中村 2004，阿部ら 2012）。しかし明治以前に和名が付けられた（知られた）藻類は限られており，また現在とは異なる漢字表記がなされたものもあった（遠藤 1911）。例えば江戸時代の藻類語彙には当時の日本人と藻類の関わりが反映されていると考えられ，漢字表記の差異には漢名の同定を巡る議論などが背景にあったと見られる。本稿では特に江戸後期の節用集の一つ，『永代節用無尽蔵（えいたいせつようむじんぞう）』（古典籍の書名は新字体で示した；以下『永代節用』）の天保 2 年版（河邊ら 1831；図 1）に着目し，同書に収録された藻類関連語彙や漢字表記を調べ，現行図鑑の漢字名や明治・現行辞書の語彙との比較を行った。

材料と方法

大冊本節用集と天保 2 年版『永代節用無尽蔵』

節用集（せつようしゅう）とは室町時代から明治時代にかけて用いられた，仮名（音）から漢字表記を引くための，即ち漢字を書くための辞書の総称である。原本の『節用集』（編者不明，室町中期成立；当時は「せっちょうしゅう」と発音）は現存が確認されていないが，当初は改編されつつ写本で，後に刊本によって広まったとされる（萩原 1995，西崎 1995，湯浅 1995）。慶長末（1615 年）までに成立した古写本・刊本は特に「古本節用集」と呼ばれる。江戸時代には 600 点もの様々な節用集が刊行され（佐藤 2017），江戸中期以降には収録語数が大幅に増え，大量の付録（教養記事など）が加わった大冊の節用集が多く発行された（湯浅 1995，佐藤 2017）。

本研究ではオークションサイトを通じて京都の出品者より購入した天保 2 年版の『永代節用』（河邊ら 1831；図 1）を検討した（発行年は巻末刊記による）。『永代節用』も大冊の節用集で，天保 2 年版では付録部（図 1C）が 100 丁弱（袋綴本において 1 丁は洋装本の 2 ページに相当），辞書部（図

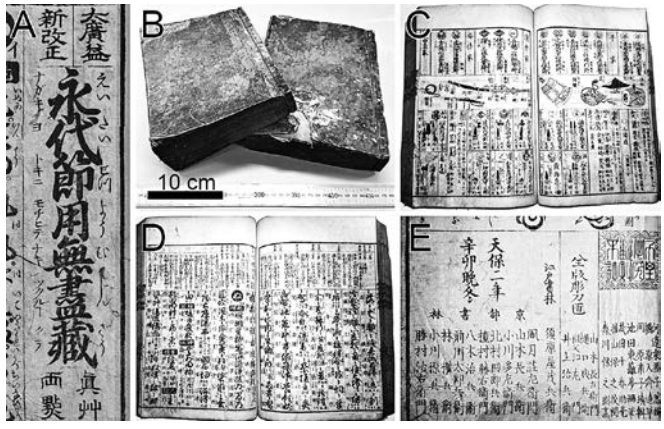

図 1．本研究で用いた天保 2 年版『永代節用無尽蔵』（河邊ら 1831）．A，内題．B，外観（2 分冊）．C，付録部の一部．D，辞書部の一部（上段は付録の歴史年表）．E，巻末刊記．

1D）が 300 丁余りとなっていた。正確な収録語数は不明だが，10 丁分（第 130，160，190，220，250，280，310，340，370，400 丁）の語数を数えた結果，全体の収録語数は 3.9 万 ± 0.7 万語と見積もられた。本書はやや高額（1 ～ 2 両程度）で，比較的裕福な家が購入して関係者や近隣の人々に用いられた（横山 1990, 横山ら 1998）。大冊本節用集の中でも『永代節用』は最も普及したものの一つで，特に現存数が多いことが知られている（横山 1990，横山ら 1998）。

文久 4 年版（河邊ら 1864；オークションサイトを通じて札幌の出品者より購入）の巻末刊記によれば，『永代節用』は寛延 3 年（1750 年）に元刻，天保 2 年に新刻，嘉永 2 年（1849 年）に再刻，文久 4 年に四刻が刊行された。しかし寛延 3 年版は 100 丁余りの厚さだったとされ（横山 1990），天保 2 年版は大冊本化した最初期の版である（文久 4 年版の巻末刊記にない大冊の文政 13 年〔1830 年〕版も確認されている；横山 1990，横山ら 1998）。なお天保 2 年版と文久 4 年版の辞書部の丁数は同じで，内容にも差がないと言われる（横山ら 1998）。天保 2 年版と思われる『永代節用』は早稲田大学図書館古典籍総合データベース（https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko06/bunko06_00024/；巻末 7 丁欠落？）で，文久 4 年版は国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベース（http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100241722）で，それぞれ閲覧できる。

『永代節用』の辞書部（図 1D）では，見出し語が仮名一文字目によりいろは各部に並べられ，各部の見出し語は「乾坤」を初めとする 13 門に分けられる。各部各門の見出し語は概ね意味に沿って並べられている。本研究では「食服（衣食）」門と「草木（艸木）」門に着目して藻類関連の見出し語を収集した。

辞書部には約 30 ～ 35 ポイント相当の文字で書かれた見出し語（ここでは「大見出し語」と呼ぶ）と約 20 ポイント相当の文字で書かれた見出し語（「小見出し語」）が並べられている（図 2）。見出し語同士は句点で区切られ，いずれの見出し語も読み仮名（平仮名）と草書体の漢字表記で示される。大見出し語にはさらに，草書体の左側に意味または読み仮名以外の読みが片仮名で示され，その左側には見出し語が楷書体漢字表記でも示される。小見出し語では楷書体や，しばしば片仮名表記の読みが省かれる。国語辞典のような語釈はなく，時に見出し語の間などに簡潔な注釈が置かれる。語頭が同じ漢字の見出し語が続く場合，二語目以降の語頭は棒線で略され，同じ読み仮名が続く場合は「同」と略される。本書では平仮名に多くの変体仮名（現在の通用仮名とは異なる字形の平仮名）が用いられている。変体仮名の翻字には中田ら（1977），古賀（2020）を参照した。

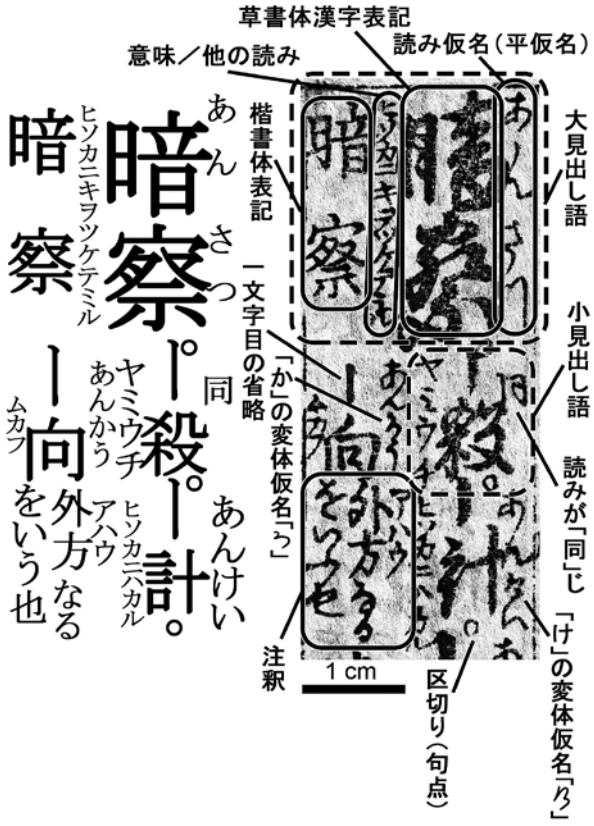

図 2. 天保 2 年版『永代節用無尽蔵』（河邊ら 1831）における見出し語の表示形式. 「あ」部「言語」門の一部より「あんさつ／暗察」,「あんさつ／暗殺」,「あんけい／暗計」,「あんかう／暗向」を含む箇所の複写（右：解説を加えた）とその翻字（左）. 小見出し語では，大見出し語にある楷書体表記と時に片仮名書きが省かれる.

『永代節用』以外の古典籍参照

必要に応じていくつかの古典籍の覆刻・翻刻・訳本を参照した（表 1）。『和名類聚抄』などで使われた万葉仮名の翻字には主に大野（1977）を参照し，「太」,「豆」,「度」については鈴木（2006）に従い清音とみなした。古典籍には著者・編者が不明のもの，発行年が不明のもの，写本でのみ知られるものなどがあるため，書名または写本の通称のみで参照し，以降個別の文献引用は割愛した。古本節用集の語彙については，伊勢本系の『伊京集』（室町末期写本）・『天正十八年本』（1590 年刊行）・『饅頭屋本』（室町末期刊行），印度本系の『黒本本』（室町中期写本），乾本系の『易林本』（易林改訂, 1597 年刊行）を対照した亀井（1960–1970）に依った（表 1）。伊勢本系が原本に近く，伊勢本系から印度本系が，印度本系から乾本系が派生し, さらに江戸時代の節用集は『易林本』から展開したとされる（西崎 1995，湯浅 1995）。

語彙の収集と比較

天保 2 年版の『永代節用』の「食服」門および「草木」門の語彙を調べ，読み仮名と漢字表記に基づいて藻類関連語彙を抜き出した。藻類関連語彙のうち, 種から属相当の藻類（以下,「種類」）を指す語については現行の和名・学名と対応づけた。『永代節用』には語釈がほぼ含まれないため，厳密な同定を行うことはできない。そのため主に田中・中村（2004），阿部ら（2012），吉田ら（2015），菊地（2020）を参考にして

表 1．参照した古典籍と典拠．参考として，古本節用集（『伊京集』・『天正十八年本』・『饅頭屋本』・『黒本本』・『易林本』）および『永代節用』も示した．

書名	著者等	成立年等	参照した文献
『本草和名』	深根輔仁著	918 年成立	與謝野ら（1926）
『和名類聚抄』	源順著	承平年間（931–938 年）成立	京都帝國大學文學部國語學國文學研究室（1943）（十巻本）；正宗（1967）（二十巻本）
『名語記』	経尊著	1275 年成立	北野（1983）
『黒本本』	（不明）	室町中期写本	亀井（1960–1970）
『伊京集』	（不明）	室町末期写本	亀井（1960–1970）
『饅頭屋本』	（不明）	室町末期刊行	亀井（1960–1970）
『天正十八年本』	（不明）	1590 年刊行	亀井（1960–1970）
『易林本』	易林改訂	1597 年刊行	亀井（1960–1970）
『毛吹草』	松江重頼著	1645 年刊行	加藤（1978, 1980）
『本朝食鑑』	人見必大著	1697 年刊行	島田（1976–1981）
『大和本草』	貝原益軒著	1709 年刊行	白井（1980）・矢野ら（1980）
『和漢三才図会』	寺島良安著	1712 年成立，1732 年刊行	和漢三才圖會刊行委員会（1970）
『本草綱目啓蒙』	小野蘭山口授	1803 ～ 1806 年刊行	杉本（1974）
『本草図譜』	岩崎灌園著	1828 年成立	北村ら（1986–1991）
『永代節用無尽蔵』（天保 2 年版）	河邊ら著	1831 年刊行	（刊本現物）
『永代節用無尽蔵』（文久 4 年版）	河邊ら著	1864 年刊行	（刊本現物）

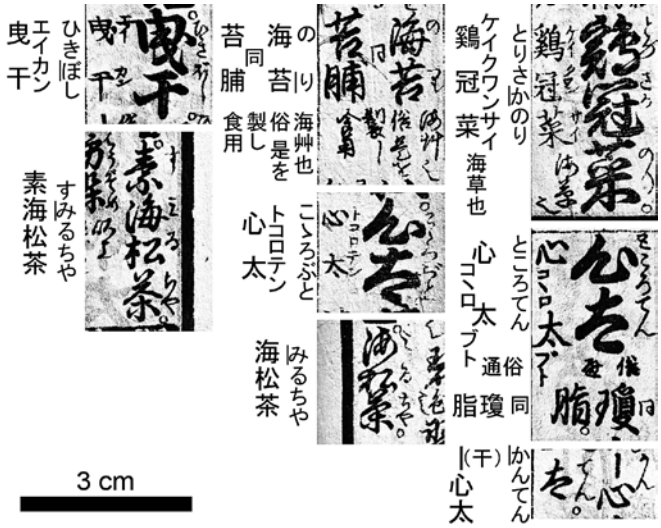

図 3．天保 2 年版『永代節用無尽蔵』（河邊ら 1831）の「食服」門に収録された藻類関連語彙の複写（各列右）およびその翻字（各列左）．同書の掲載順（仮名一文字目のいろは順）；大見出し語の草書体表記は翻字を省略；変体仮名を通用仮名に改めた箇所は左傍線で表記；棒線で省略された語頭は一部括弧書きで補足．

読み仮名が同一か類似した和名（とその学名）に対応づけた。同一か類似した和名が見つからない場合，岡村（1902）や遠藤（1911）などに掲載された異名に基づいて和名・学名と対応づけた。『永代節用』で異名として扱われているものは，現在の分類に関わらず異名として扱った。

『永代節用』に収録された藻類について，明治および現行の国語辞典との比較を行った。明治期の国語辞典として『言海』の第 150 版（約 4 万語収録；大槻 1905）を，現行の小型国語辞典として『新明解国語辞典』の第 8 版（約 8 万語収録；山田ら 2020）を，現行の中型国語辞典として『広辞苑』の第 7 版（約 25 万語収録；新村 2018）および『大辞林』の第 4 版（約 25 万語収録；松村 2019）を，現行の大型国語辞典として『日本国語大辞典』の第 2 版（約 50 万語収録；日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 2000–2002）を対象にした（以下，一部例外を除き，辞書名は版数を省いた書名で記す）。比較に際しては，各辞書に対し，読み仮名に基づいて『永代節用』の藻類語彙を検索し，同一か類似した見出し語（子見出しを含む）を数えた。さらに種類ごとに異名をまとめ，『永代節用』からの再録率とした。

結果と考察

1.「食服」門・「草木」門に見られる藻類関連の見出し語

天保 2 年版『永代節用』の「食服」門には確認出来た限り 10 の藻類関連語彙（うち大見出し語 4，小見出し語 6）が含まれた（図 3）。このうち「かんてん／干心太」，「こゝろぶと／心太」，「ところてん／心太・瓊脂」，「ひきぼし／曳干」（引干し；海藻などを引いて干したもの）は藻類加工品を，「みるちや／海松茶」，「すみるちや／素海松茶」は色の名前を，「のり／海苔・苔脯」は加工して食する海苔全般を指し，特定の藻類を指す語は「とりさかのり／鶏冠菜」のみであった。

同様に「草木」門には 56 の藻類関連語彙（うち大見出し語 42，小見出し語 14）が認められた（図 4）。このうち「ゐのみどり／井中苔」（『本草和名』，『和漢三才図会』，『本草綱目啓蒙』にも収録され，井戸の壁面につく藻類マットを指すと思われる），「かいさう／海藻」，「かわも／水藻」，「のり／海苔」，「め／和布」，「め／海藻」，「すいさう／水藻」，「も／藻」の 8 語は特定の藻類を指す語ではなく，藻類全体か，生息環境や形態がある程度類似した幅広い藻類を指す語と考えられる（ただし，古くは「め／和布」・「め／海藻」が「わかめ」を指した可能性がある；遠藤 1911）。残る 48 語は読み仮名が同じ 34 語にまとめられ，さらに異名を整理したところ，「食服」門の「とりさかのり／鶏冠菜」と合わせて 25 種類の藻類が含まれた（表 2）。

同一の読み仮名に対して複数の漢字表記が示されているのは，当時の漢字表記が単に日本語を漢字に直した漢字名ではなく，漢名だったことと関係するだろう（一方で明治以降に命名された和名に対しては，一般に語源に即した漢字名が充てられている）。明治以前の学問は漢文が中心で，漢名が現在の学名のような役割を果たしていた。漢名の多くは元々中国の名称で，一部には「わかめ／和布」などの和製 “漢名” も作られた（宮下 1974）。これらの漢名の「読み」は漢字の音

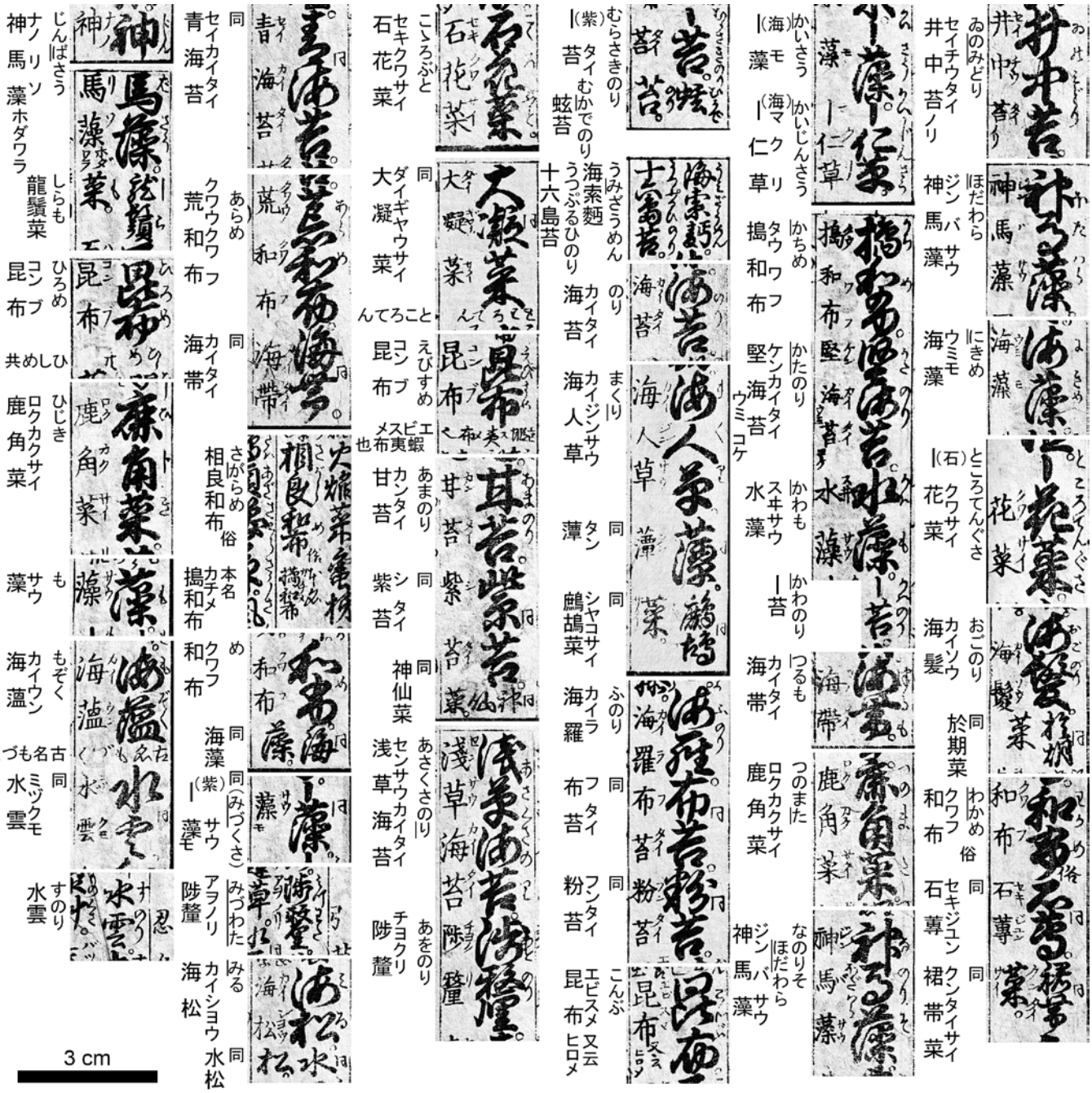

図 4. 天保 2 年版『永代節用無尽蔵』（河邊ら 1831）の「草木」門に収録された藻類関連語彙の複写（各列右）およびその翻字（各列左）．詳細は図 3 の説明文を参照.

訓から自然に形成される読みではなく，漢名の翻訳であった。例えば「紫菜」の訓読みは「あまのり」とされるが,「紫」に「あま」という読みも,「菜」に「のり」という読みもない。中国語における「紫菜」が日本語における「あまのり」と同一であるとして，漢文を読む際に「紫菜」を「あまのり」と訓読（訳）したものである（宮下 1970, 1974）。和製漢名の多くも，和名の音とは無関係な，藻類の特徴を表した漢語風の造語であった。結果, 和名の同定によっては充てられる漢名が変わり，またわかりやすい漢字が俗に充てられることもあり，漢名の多様性が生じたのであろう。

『永代節用』に掲載されている種類を見渡してみると，その大部分は食用であり，日用百科という『永代節用』の特徴があるにしても江戸時代の日本人にとっての藻類がまずは食用品として認識されていたことが覗える。江戸時代の節用集の語彙では,「海苔」,「心太」,「曳干」がよく継承されたことが知られており（市毛・石川 1984),『永代節用』にも見られたことから，これら加工品が広く食されていたことがわかる。特定の種類を指す語としては,「とりさかのり／鶏冠菜」のみ

表 2. 天保 2 年版『永代節用無尽蔵』（河邊ら 1831）に収録された藻類名と，遠藤（1911）による扱い（『永代節用』にない，見出し扱いの漢名も示した），現行の和名（学名），および現行の漢字名．主，見出し扱い．異，異名扱い．疑，誤同定疑い．田，田中・中村（2004）にのみ表記．阿，阿部ら（2012）にのみ表記．現行の和名・学名との対応付けには岡村（1902），遠藤（1911），田中・中村（2004），阿部ら（2012），吉田ら（2015），菊地（2020）などを参照した．

読み仮名／漢名（あいうえお順）	遠藤（1911）による扱い	現行の和名（学名）	現行の漢字名
あさくさのり／浅草海苔	淺草海苔異（アマノリの地方名）	アサクサノリ（*Neopyropia tenera* (Kjellman) L. E. Yang & J. Brodie）	浅草海苔
あまのり／甘苔・紫苔・神仙菜	甘苔主・紫苔異・神仙菜（一部「神佛菜」と誤記）異	アマノリ類（*Neopyropia* spp. および類縁種）	甘海苔・紫菜田・紫海苔田・神仙菜田
あらめ／荒和布・海帯	荒布主・海帯疑	アラメ（*Eisenia bicyclis* (Kjellman) Setchell）	荒布・滑海藻阿
あをのり／陟釐・青海苔	青海苔主・青苔異・陟厘（陟釐）疑	アオノリ類（ヒラアオノリ〔*Ulva compressa* Linnaeus〕・ボウアオノリ〔*U. intestinalis* Linnaeus〕・ウスバアオノリ〔*U. linza* Linnaeus〕）	青苔田・青海苔阿
うつぷるひのり／十六島苔	十六島海苔異（アマノリの地方名）	ウップルイノリ（*Pyropia pseudolinearis* (Ueda) N. Kikuchi *et al.*）	十六島海苔阿
うみざうめん／海索麪	海索麪主	ウミゾウメン（*Nemalion vermiculare* Suringar）	海素麺
えびすめ／昆布（→こんぶ）			
おごのり／海髪・於期菜	於期菜主・海髪疑	オゴノリ（*Gracilaria vermiculophylla* (Ohmi) Papenfuss）	海髪苔田・海髪海苔阿・於胡苔田・於胡海苔阿・海髪
かいじんさう／海仁草（→まくり）			
かたのり／堅海苔	硬苔主	カタノリ（*Grateloupia divaricata* Okamura）	堅海苔阿
かちめ／搗和布	搗布主	カジメ（*Ecklonia cava* Kjellman）	搗布
かわのり／水苔	河苔主・水苔異など	カワノリ（*Prasiola japonica* Yatabe）	—
こゝろぶと／石花菜・大凝菜（→ところてんぐさ）			
こんぶ／昆布	昆布主・海帯菜異など	コンブ類（*Saccharina* spp. および類縁種）	昆布
さがらめ／相良和布（→かちめ）			
しらも／龍鬚菜	白藻主・龍鬚菜疑など	シラモ（*Gracilaria parvispora* I. A. Abbott）	白藻・龍鬚菜阿
じんばさう／神馬藻（→ほだわら）			
すのり／水雲	—	カワモズク（*Batrachospermum* spp.）？ あるいはカワノリ，フトモズク（*Tinocladia crassa* (Suringar) Kylin），オキナワモズク（*Cladosiphon okamuranus* Tokida）	—
つのまた／鹿角菜	—	ツノマタ（*Chondrus ocellatus* Holmes）	角叉
つるも／海帯	—	ツルモ（*Chorda asiatica* H. Sasaki & H. Kawai）	蔓藻
ところてんぐさ／石花菜	大凝菜異・天草異・石花菜疑	テングサ類（*Gelidium* spp. および類縁種）	天草
とりさかのり／鶏冠菜	雞冠菜主	トサカノリ（*Meristotheca papulosa* (Montagne) J. Agardh）	鶏冠苔田・鶏冠海苔阿
なのりそ／神馬藻（→ほだわら）			
にきめ／海藻（→わかめ）			
ひじき／鹿角菜	鹿尾菜疑	ヒジキ（*Sargassum fusiforme* (Harvey) Setchell）	鹿尾菜・海鹿毛阿
ひろめ／昆布（→こんぶ）			
ふのり／海羅・布苔・粉苔	布苔異・海羅疑	フノリ属（*Gloiopeltis* spp.）	布苔田・布海苔阿
ほだわら／神馬藻	神馬藻異	ホンダワラ属（*Sargassum* spp.）	馬尾藻阿・神馬藻阿・本俵阿
まくり／海人草・薄・鷓鴣菜	鷓鴣菜主・海仁草（一部「海仁岸」と誤記）異・海人草異・薄疑	マクリ（*Digenea simplex* (Wulfen) C. Agardh）	海人草・鷓鴣菜阿
みづわた／陟釐（→あをのり）			
みる／海松・水松	海松主・水松疑	ミル（*Codium fragile* (Suringar) Hariot）	海松
むかでのり／蚿苔	百足苔主	ムカデノリ（*Grateloupia asiatica* Kawaguchi & H. W. Wang）	百足苔田・百足海苔阿
むらさきのり／紫苔（→あまのり）			
もぞく／海蘊・水雲	水雲主・海蘊疑	モズク（*Nemacystis decipiens* (Suringar) Kuckuck）	藻付く
わかめ／和布・石蓴・裙帯菜	和布主・裙帯菜疑・石蓴疑	ワカメ（*Undaria pinnatifida* (Harvey) Suringar）	若布・和布田

が「食服」門に収録されたが，本種のみを特別視する理由は見当たらず，編集者が配置を誤ったものかもしれない。

2. 現行の漢字名との異同

『永代節用』の漢名と田中・中村（2004）・阿部ら（2012）の漢字名を比較してみると（表 2），『永代節用』に固有の漢字表記が 29 件，『永代節用』になく，田中・中村（2004）・阿部ら（2012）の少なくともいずれかにある漢字表記が 27 件あった。この中から「甘苔」と「甘海苔」，「荒和布」と「荒布」の様な些末な表記揺れを除くと，『永代節用』独自のものが 18 件，『永代節用』にないものが 12 件あった。

漢字表記の揺れとしては，和名が「～のり」や「～め」で終わる藻類の漢名語尾が変化しやすかった。他には今では普通でない漢字表記を現代の用法に合わせたもの，単なる誤字と考えられるものがあった。また『永代節用』独自の漢名には，後に同定が疑問視されたものが多数含まれた。

2.1.「～のり／～海苔・～苔・～菜」

読み仮名が「～のり」で終わる「のり」語尾藻類の漢名では，しばしば「海苔」・「苔」・「菜」の表記揺れが見られ（「紫菜」と「紫苔」，「紫海苔」など），『永代節用』内部でも種類ごとに語尾が定まっていない（表 2）。歴史的には「あまのり」において，漢名「紫菜」の他に「甘海苔」，「甘苔」などの和製漢名が充てられたため（宮下 1970，1974，藤塚 2020），「海苔」・「苔」・「菜」が「～のり」に対する語尾と見なされるようになったのであろう。

『日本国語大辞典』によると平安末期から江戸初期の辞書（例えば『易林本』）で「苔」単独で「のり」と訓じたものもあった。しかし『永代節用』では「のり」単独の漢字表記として「海苔・苔脯」しか示していない。現行の漢和・漢字辞典 10 冊を確認した限り，通常は「苔」・「菜」を「のり」とは読ませず，『新明解現代漢和辞典』（影山ら 2013）でのみ「苔」の古訓として「のり」を示していた。

2.2.「～め／～和布・～布」

『和名類聚抄』では「阿良米・阿良女（＝あらめ）／滑海藻」に対して「俗用荒布」，「加知女（＝かちめ）／末滑海藻・未滑海藻」に対して「俗用搗布」とある。これが古本節用集の一部などでは『永代節用』と同じく「荒和布」（『饅頭屋本』，『易林本』，『毛吹草』）や「搗和布」（『易林本』，『毛吹草』）になっている。

「和布」は『和名類聚抄』で「邇岐米・迩木米（＝にきめ）／海藻」の俗用とされたが（おそらくワカメを指した；遠藤 1911），鎌倉時代の『名語記』では単に「め／和布」となっていた。古本節用集（『伊京集』，『天正十八年本』，『饅頭屋本』，『黒本本』，『易林本』）や『永代節用』にも「め／和布」とあり，これが「め」語尾と同一視され，「荒和布」や「搗和布」が生まれたのであろう。しかし江戸期の資料でも『和漢三才図会』には「荒布」が見え，後の『言海』でも「荒布」，「搗布」とあるため，「荒和布」や「搗和布」は室町末期から江戸期にかけて一時的に使われた漢名と見られる。

2.3. 漢字表記の現代化

『永代節用』の「うみざうめん／海索麺」と「むかでのり／蚿苔」が，田中・中村（2004），阿部ら（2012）でそれぞれ「海素麺」と「百足（海）苔」になっている。『本朝食鑑』などによると，「そうめん」は本来「索麺」だったものが誤って「素麺」になったとされる（「麺」は「麺」の異体字）。「むかで」も「蚿」（『黒本本』，『易林本』）または「馬蚿」（『黒本本』，『伊京集』，『天正十八年本』）と書かれたことがある。ただし『永代節用』では「むかで／百足・蜈蚣・天龍」とし，「むかで／蚿」とはしていない。

また現在の漢字名は新字体で書かれており，旧字体で書かれた『永代節用』と新字体の間には見掛け上若干の差異があるものもある。

2.4. 誤字

『永代節用』の「於期菜」は現行図鑑（田中・中村 2004，阿部ら 2012）で「於胡（海）苔」となっている。島田・高橋（2012）を見ると，奈良時代より江戸時代まで「於期」系の表記が主流であったが，江戸に入ってから「於胡」の用例がわずかに出現する（写本の際の誤字？）。『和漢三才図会』にも「於期菜」（見出し語）と「於胡菜」（解説文）の表記揺れが見られる。

また『永代節用』では「ひじき」に「鹿角菜」と充てているが，「つのまた」にも「鹿角菜」を充てている。『和名類聚抄』には「比須岐毛・比須木毛（＝ひすきも）／鹿尾菜」と「都乃万太・豆乃萬太（＝つのまた）／鹿角菜」が見られ，現在も『新明解国語辞典』，『広辞苑』，『大辞林』，『日本国語大辞典』では「ヒジキ」に「鹿尾菜」（一部「羊栖菜」とも）を充てているため，「ひじき／鹿角菜」は誤字であろう（ただし他の使用例もある；『日本国語大辞典』）。

他，「もぞく・もづく」について『永代節用』（および陶山 1890）では「海薀」としているが，『大和本草』，『和漢三才図会』，『本草綱目啓蒙』，『本草図譜』などでは「海蘊」とある。

2.5. 同定が疑わしいもの

田中・中村（2004）は漢字名の一部を先行研究に従ったとしていて，特に参考文献中に示された遠藤（1911）の復刻版を参照したと見られる。遠藤（1911）は多くの漢名の同定に疑問を呈したため，それらの漢名のほとんどは使用されなくなった。『永代節用』収録の漢名のうち，遠藤（1911）が疑問を呈したものとしては，「あらめ／海帯」，「あをのり／陟釐」，「おごのり／海髪」，「しらも／龍鬚菜」，「ところてんぐさ・こゝろぶと／石花菜」，「ひじき／鹿尾菜」，「ふのり／海羅」，「まくり／蕈」，「みる／水松」，「もぞく／海薀」，「わかめ／裙帯菜」が挙げられる。この多くは現在は用いられていないが（田中・中村 2004，阿部ら 2012），用例の多さを考慮したのか，「おごのり／海髪」，「ひじき／鹿尾菜」については田中・中村（2004）・阿部ら（2012）の両者が，「しらも／龍鬚菜」については阿部ら（2012）が示している。ただし「海髪」はイギスにも充てられている（田中・中村 2004，阿部ら 2012）。

その他，『永代節用』と現行漢字名の異同について，特筆す

べきことを以下で個別に示す。

2.6.「あらめ／荒和布・海帯」,「かちめ／搗和布」,「つるも／海帯」

「あらめ」と「かぢめ」は地域・時代によって逆に用いられたり混同されており（遠藤 1911），中国名との対応づけに問題がある。「海帯」を巡っては種同定が定まっておらず，混乱が見られる（遠藤 1911，牧野 1936, 1953）。なお他の資料では「海帯」を「つるも」と訓じた例は見つからなかった。田中・中村（2004）や阿部ら（2012）の「蔓藻」は，遅くとも『広辞苑』初版（新村 1955）に見られ，おそらくは語源を想像した当て字であろう。しかし『毛吹草』には「つるも／弦藻」とあり，本来の語源が「蔓」か「弦」のいずれであったのか疑問が残る。

2.7.「あをのり／陟釐・青海苔」,「みづわた／陟釐」

『永代節用』では「みづわた／陟釐」に対して「アヲノリ」の片仮名読みが併記され，両者が同一視された。『本草綱目啓蒙』や『本草図譜』では「かはもづく・かはあをのり／陟釐」と「あをみどろ／水綿」（いずれも異名あり）が区別されたが，遠藤（1911）はアオミドロ類の漢名を「水綿」とし，「陟釐」を異名とした。

2.8.「おごのり／海髪・於期菜」

『永代節用』では「おごのり／海髪・於期菜」としたが，『和名類聚抄』では「於期菜」と「伊岐須・以木須（＝いぎす・いきす）／海髪」は別の項目である。『和漢三才図会』でも「海髪」は「いぎす」と訓じられ，「おごのり」と訓ずることには議論がある（遠藤 1911）。

2.9.「かちめ／搗和布」,「さがらめ／相良和布」

「さがらめ／相良和布」は『永代節用』だけでなく,『大和本草』や『和漢三才図会』，遠藤（1911）でも（「相良布」として）「かち（ぢ）め」の異名とされたが，後に独立種とされた。近年まで *Eisenia arborea* Areschoug と同定されてきた（吉田ら 2015）が，Kawai *et al.* (2020) により新種 *Eisenia nipponica* H.Kawai, S.Akita, K.Hashimoto & T.Hanyuda に再分類された。

2.10.「こんぶ・えびすめ・ひろめ／昆布」

『永代節用』に見られる「えびすめ」と「ひろめ」の読み（異名）は田中・中村（2004），阿部ら（2012）には示されていない。むしろ「ヒロメ」は現在,「広布」として別の種（*Undaria undarioides* (Yendo) Okamura）の和名に用いられている。「昆布」についても古来中国では現在のワカメを指していたと，牧野（1936, 1953）が，論じている。

なお『永代節用』では「ひろめ／昆布」に対して「ひしめ共（トモ）」と異名が示されているが，この異名は他の資料では見つからなかった。「えびすめ／昆布」には「蝦夷布也（ナリ）」と語源の説明がある（漢名ではない）。

2.11.「すのり／水雲」

「すのり」の指す藻類としては，カワノリ（『日本国語大辞典』), カワモズク（岸 2018), フトモズク（『日本国語大辞典』; 岡村 1902，遠藤 1911，千原 1970；千葉・鹿児島の方言？），オキナワモズク（陶山 1890，阿部ら 2012，当真 2019；沖縄の方言？），アマノリ類（「簀海苔」;遠藤 1911）が挙げられる。『永代節用』では「かわのり／水苔」や「あまのり／甘苔・紫苔・神仙菜」が別にあり, フトモズク・オキナワモズクは地方名（岡村 1902, 遠藤 1911, 阿部ら 2012）であるため,「もぞく／海薀・水雲」と通じる「すのり／水雲」はカワモズクと推測される。なお阿部ら（2012）はオキナワモズクを指す沖縄の方言として「酢海苔（すぬい）」としている。

2.12.「つのまた／鹿角菜」

『本草和名』や『和名類聚抄』で既に「鹿角菜」を「都乃末多・都乃万太・豆乃萬太（＝つのまた）」と訓じているが，その後フノリとの混同があった（宮下 1974）。『言海』では「鹿角菜」をフノリと見なしてツノマタに「角叉」を充てていて，『広辞苑』や『大辞林』,『日本国語大辞典』，現行の図鑑（田中・中村 2004，阿部ら 2012）も「角叉」としている（『新明解国語辞典』は「鹿角菜」として「『角叉』の意」と注釈。『日本国語大辞典』では「鹿角菜」など他の表記も引用）。

2.13.「ところてんぐさ／石花菜」,「こゝろぶと／石花菜・大凝菜」

「石花菜」と「大凝菜」を充てた『永代節用』に対し，現在は寒天の原料となる海藻の総称として「テングサ／天草」が用いられる。「大凝菜」は『和名類聚抄』に見え,「古ゝ呂布度・古ゝ呂布止（＝こころふと）」と訓じられ，俗用として「心太」が示された。「こころふ（ぶ）と」が「こころてい」を経て「ところてん」となり，藻類名として「ところてんぐさ」となり，略して「てんぐさ」になったとされる（遠藤 1911）。

『永代節用』の「と」部「食服」門には「ところてん／心太」など 4 語彙があるが,「草木」門の「石花菜・大凝菜」は使われず，藻類と加工品が区別されていたことがわかる。

2.14.「ふのり／海羅・布苔・粉苔」

「粉苔」は『易林本』に見られるが，当て字であろうか。

2.15.「もぞく／海薀・水雲」

「水雲」は『倭名類聚抄』まで遡り，現在でも『新明解国語辞典』,『広辞苑』,『大辞林』,『日本国語大辞典』が示している（「海薀」については「同定が疑わしいもの」・「誤字」を参照）。一方で田中・中村（2004），阿部ら（2012）の「モズク／藻付く」は「モズク」と「モヅク」の仮名遣いを巡る議論で登場した（新村 2008，北山 2008）。しかし新村（2008）の根拠は口伝であり（三浦ら 1992），北山（2008）の引いた語源辞典（吉田 2001, 前田 2005）やその典拠に挙げられた『名語記』でも漢字表記は「水雲」とされ,「藻付・藻着」は語源の義（意味）として言及されたのみである。しかも語源には諸説ある（吉田 2001，前田 2005；『日本国語大辞典』）。

なお仮名遣いの観点で,『永代節用』に「もぞく／古名もづく」とあり, 江戸後期に（少なくとも一部で）「だ」行から「ざ」行への転訛があったことは興味深い。ただし明治期の辞書(『言海』）では「もづく」となっている。

2.16.「わかめ／和布・石蓴・裙帯菜」,「にきめ／海藻」

遠藤（1911）は『本草綱目啓蒙』や『本草図譜』と同様に「石蓴」を「あをさ」に充て,「裙帯菜」については「はばのり」を指

す可能性を指摘した。牧野（1953）も「裙帯菜」はワカメではなく，アオサ類である可能性を疑っている。

3.『永代節用』と現在の国語辞典の語彙比較

『永代節用』に収録された藻類を明治および現在の国語辞典で確認してみると（表 3),『言海』（約 4 万語収録）には『永代節用』収録の 25 種類のうち 21 種類（84%）が,『新明解国語辞典』（約 8 万語収録）には 15 種類（60%）が,『広辞苑』（約 25 万語収録）と『大辞林』（約 25 万語収録）にはそれぞれ同じ 22 種類（88%）が,『日本国語大辞典』（約 50 万語収録）には 25 種類全て（語としては 97%）が再録されていた。

表 3. 天保 2 年版『永代節用無尽蔵』(『永代節用』; 河邊ら 1831）に収録された藻類および『永代節用』における扱いと，明治期および現行の国語辞典における収録語の比較.『永代節用』における異名は代表の種類名の下に括弧で示した．言海,『言海』第 150 版（大槻 1905）．新明国,『新明解国語辞典』第 8 版（山田ら 2020）．広辞苑,『広辞苑』第 7 版（新村 2018）．大辞林,『大辞林』第 4 版（松村 2019）．日国,『日本国語大辞典』第 2 版（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 2000–2002）．大, 大見出し語．小, 小見出し語．○，収録．×，未収録.

読み仮名／現行和名	扱い	言海	新明国	広辞苑	大辞林	日国
あさくさのり／アサクサノリ	大	○	○	○	○	○
あまのり／アマノリ類	大	○	×	○	○	○
(むらさきのり)	大	○	×	○	○	○
あらめ／アラメ	大	○	○	○	○	○
あをのり／アオノリ類	大	○	○	○	○	○
(みづわた)	小	×	×	×	×	×
うつぷるひのり／ウップルイノリ	小	○	×	×	×	○
うみざうめん／ウミゾウメン	小	○	×	○	○	○
おごのり／オゴノリ	大	○	○	○	○	○
かたのり／カタノリ	大	×	×	×	×	○
かちめ／カジメ	大	○	○	○	○	○
(さがらめ)	小	○	×	○	×	○
かわのり／カワノリ	小	○	×	○	○	○
こんぶ／コンブ類	大	○	○	○	○	○
(えびすめ)	大	○	×	×	×	○
(ひろめ)	大	○	×	○	○	○
しらも／シラモ	小	○	×	○	○	○
すのり／カワモズク？	小	×	×	×	×	○
つのまた／ツノマタ	大	○	○	○	○	○
つるも／ツルモ	大	×	×	○	○	○
ところてんぐさ／テングサ類	大	○	○	○	○	○
(こゝろぶと)	大	○	×	○	○	○
とりさかのり／トサカノリ	大	○	×	○	○	○
ひじき／ヒジキ	大	○	○	○	○	○
ふのり／フノリ属	大	○	○	○	○	○
ほだわら／ホンダワラ属	大	○	○	○	○	○
(じんばさう)	大	×	×	×	×	○
(なのりそ)	大	○	×	○	○	○
まくり／マクリ	大	○	○	○	○	○
(かいじんさう)	大	×	○	○	○	○
みる／ミル	大	○	○	○	○	○
むかでのり／ムカデノリ	小	×	×	○	○	○
もぞく／モズク	大	○	○	○	○	○
わかめ／ワカメ	大	○	○	○	○	○
(にきめ)	大	○	×	○	○	○

『日本国語大辞典』は，時代を問わない網羅的な語彙収集を目指しているため再録率が高い。なお同書には藻類の意味での「みづわた」は掲載されず, 海綿を意味する「みずわた／水綿」が収録された。

明治期の国語辞典であり,『永代節用』と同等数の語彙を収録する『言海』における再録率は，収録語彙が倍程度である現代の小型国語辞典より明らかに高く，6 倍を越える語彙を有する現代の中型国語辞典に匹敵していることは興味深い。この差はおそらく語彙の重要度の変化，すなわち時代による日用語彙の変化を反映していると思われる。実際に『永代節用』における大見出し語の再録率は『新明解国語辞典』で 79%,『広辞苑』・『大辞林』で 95% なのに対して，小見出し語の再録率はそれぞれ 0% と 67% であった。

「うつぷるひのり」・「かたのり」・「すのり」の 3 種類は『日本国語大辞典』を除く現行辞書 3 点のいずれにも収録されず，いずれも「のり」語尾藻類であった（異名が他の語尾を持つもの，アマノリ類以外のものも含んだ 11 種類)。「のり」語尾藻類は全体的にも再録率が低く,『新明解国語辞典』では再録率が 36% で, その他の語彙（79%）よりも著しく低かった。『広辞苑』・『大辞林』では「うつぷるひのり」・「かたのり」・「すのり」以外の藻類は全て再録されていた（「のり」語尾藻類の再録率 73%，その他 100%)。現在の商品では「焼き海苔」,「味付け海苔」や「海苔の佃煮」など加工法が強調されがちである（海苔の種類を前面に出した「青海苔」など例外もあるが）のに対して，江戸時代には様々な海苔の種類が意識して食べ分けられていたのかも知れない。

結語

本稿では江戸後期の百科辞書『永代節用』を中心に，藻類名の漢字表記の今昔を比較した。『永代節用』の漢名と現代の漢字名には様々な違いが見られ，江戸後期の漢名には本来の（中国語由来の）漢名・和製漢名・俗名・誤同定などが混在しており，誤同定の排除や異名の整理を経て現在の漢字名が成立したものと考えられた。

江戸後期と現代の漢字表記の大きな違いは，かつての漢名が学名のような役割を果たしていたのに対して，現代の漢字名は学名としての役割は持たず，案ずるに，仮名表記からは読み取りづらい和名の意味・語源を示す役割を果たしている（日本藻類学会藻類和名ワーキンググループ 2018)。結果，かつての漢名の多くが読み仮名（和名）の意味・語源や音とは無関係な表記だったのに対して，新しい漢字名には和名の語要素ごとに漢字を充てた，わかりやすいものが多い（田中・中村 2004，阿部ら 2012)。さらに田中・中村（2004)，阿部ら（2012）は一般向けの書籍であるため，かつての漢名を網羅しているわけではなく，遠藤（1911）などが誤用と疑った用例の多くも掲載していない（表 2)。しかし古典籍を読み解き，過去の藻類相や藻類利用の実態を調べるためには誤用も含めた当時の用法を理解する必要がある。『永代節用』のような辞書資料の検討は，過去の用法理解に役立つであろう。

また節用集自体の語彙にも，江戸後期の「常識」の一端が反映されているはずである。例えば市毛・石川（1984）は「食」関連語彙の変遷から，藻類食を含む食生活の変化を探ろうとしている。節用集は江戸期に無数に発行されており，今後それらにおける「草木」部の語彙の追跡や，延いては明治から現在までの辞書資料について藻類語彙の変遷を追うことも，日本人と藻類の関わりをより深く理解する一つの手段となろう。

謝辞

本稿の執筆にあたって，『永代節用』の判読や原稿へのご助言をいただいた友人の川瀬健人氏，宮川幸祐氏，横浜国立大学の矢野倫子氏には，この場を借りて深く感謝申し上げます。

引用文献

阿部秀樹・野田三千代・神谷充伸 2012．ネイチャーウォッチングガイドブック：海藻．誠文堂新光社，東京．
千原光雄 1970．海藻・淡水藻類．女子栄養大学出版部（編）食用植物図説．pp. 335–366．女子栄養大学出版部，東京．
藤塚悦司 2020．養殖以前のノリ文化．二羽恭介（編）シリーズ〈水産の科学〉4．ノリの科学．pp. 4–7．朝倉書店，東京．
萩原義雄 1995．室町時代の辞書．西崎亨（編）日本古辞書を学ぶ人のために．pp. 182–222．世界思想社，京都．
市毛弘子・石川松太郎 1984．近世節用集類に収録された食生活関連語彙についての調査（第 2 報）:いも類，でん粉類，種実類，豆類，野菜類，果実類，きのこ類，藻類関係語彙を中心に．家政学雑誌 35: 736–746．
影山輝國・伊藤文生・山田俊雄・戸川芳郎（編）2013．新明解現代漢和辞典．三省堂，東京．
亀井孝（編）1960–1970．五本対照改編節用集（1 ～ 10）．私家版．
加藤定彦（編）1978．初印本 毛吹草 影印篇．ゆまに書房，東京．
加藤定彦（編）1980．初印本 毛吹草 索引篇．ゆまに書房，東京．
河邊桒揚子・堀源入齊・堀原甫子ら 1831．大廣益新改正 永代節用無盡藏 眞艸両點．須原屋茂兵衛，江戸；凧月荘左衛門・山本長兵衛・小川多左衛門ほか，京都．
河邉桑楊子・堀源入斎・堀源甫子ら 1864．大廣益新改正 大日本永代節用無盡藏 真艸両點．須原屋茂兵衛，江都；風月庄左衛門・出雲寺文次郎・北村四郎兵衛ほか，京都．
Kawai, H., Akita, S., Hashimoto, K. & Hanyuda, T. 2020. A multigene molecular phylogeny of *Eisenia* reveals evidence for a new species, *Eisenia nipponica* (Laminariales), from Japan. Eur. J. Phycol. 55: 234–241.
菊地則雄 2020．形態と分類．二羽恭介（編）シリーズ〈水産の科学〉4．ノリの科学．pp. 32–61．朝倉書店，東京．
岸大弼 2018．岐阜県高山市の苔川における食用藻類 “すのり” の過去の分布および利用．地域生活学研究 9: 1–15．
北村四郎・塚本洋太郎・木島正夫 1986–1991．本草図譜総合解説，第 1 ～ 4 巻．同朋舎出版，京都．
北野克 1983．田山方南校閲 北野克写 名語記．勉誠社，東京．
北山太樹 2008．海藻の和名における仮名遣いの問題．藻類 56: 233–236．
古賀弘幸 2020．知識ゼロからの古文書を読む．幻冬舎，東京．
京都帝國大學文學部國語學國文學研究室（編）1943．狩谷棭齋箋注倭名類聚抄．全國書房，大阪．
前田富祺（監修）2005．日本語源大辞典．小学館，東京．
牧野富太郎 1936. コンブは海帶であつて昆布ではない. 政界往来 7(7): 24–25.
牧野富太郎 1953．コンブは昆布ではなく，ワカメこそ昆布だ．随筆植物一日一題．pp. 163–165．東洋書館，東京．
正宗敦夫（編）1967．倭名類聚抄．風間書房，東京．
松村明（編）2019．大辞林，第 4 版．三省堂，東京．
三浦明雄・右田清治・喜田和四郎・有賀祐勝（座長）1992．質疑応答と総合討論．三浦明雄（編）水産学シリーズ 88．食用藻類の栽培．pp. 144–150．恒星社厚生閣，東京．
宮下章 1970．海苔の歴史．全国海苔問屋協同組合連合会，東京．
宮下章 1974．ものと人間の文化史・海藻．法政大学出版局，東京．
中田易直・中田剛直・新田英治・浅井潤子（編）1977．用例かな大字典．柏書房，東京．
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 2000–2002．日本国語大辞典，第 2 版，第 1 ～ 13 版．小学館，東京．
日本藻類学会藻類和名ワーキンググループ 2018．藻類における和名の提唱と使用に関するガイドライン案について．藻類 66: 130–133．
西崎亨 1995．古本節用集．西崎亨（編）日本古辞書を学ぶ人のために．pp. 326–332．世界思想社，京都．
岡村金太郎 1902．日本藻類名彙．敬業社，東京．
大野晋 1977．万葉仮名一覧．中田易直・中田剛直・新田英治・浅井潤子（編）用例かな大字典．pp. 594–597．柏書房，東京．
大槻文彦 1905．言海，第 150 版．吉川弘文館，東京．
佐藤貴裕 2017．節用集と近世出版．和泉書院，大阪．
島田勇雄（訳注）1976–1981．本朝食鑑 1 ～ 5．東洋文庫 296，312，340，378，395．平凡社，東京．
島田めぐみ・高橋久子 2012．ハワイに残る日本語 ―「おご」を一例に―．東京学芸大学紀要　人文社会科学系 I 63: 81–88．
新村巌 2008．「モズク」と「モヅク」について．藻類 56: 232．
新村出（編）1955．広辞苑，第 1 版．岩波書店，東京．
新村出（編）2018．広辞苑，第 7 版．岩波書店，東京．
白井光太郎（校註）1980．大和本草 第 1 冊（復刻版）．有明書房，東京．
杉本つとむ（編著）1974．小野蘭山 本草綱目啓蒙 ―本文・研究・索引―．早稲田大學出版部，東京．
陶山淸猷 1890．有用藻譜，第 1 編．集成堂，東京．
鈴木豊 2006．『和名抄』所引『公望私記』の万葉仮名訓について．論集 2: 1–37．
田中次郎・中村康夫 2004．日本の海藻：基本 284．平凡社，東京．
当真武 2019. サンゴ礁の植物 沖縄の海藻と海草ものがたり. ボーダーインク，那覇.
和漢三才圖會刊行委員会（編）1970．和漢三才圖會．東京美術，東京．
山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之（編）2020．新明解国語辞典，第 8 版．三省堂，東京．
矢野宗幹（校註者代表）1980．大和本草 第 2 冊（復刻版）．有明書房，東京．
遠藤吉三郎 1911．海産植物學．博文館，東京．
横山俊夫 1990．日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について．人文学報 66: 177–202．
横山俊夫・小島三弘・杉田繁治 1998．日用百科型節用集の使われかた：地小口手沢相の電算画像処理による使用類型析出の試み．京都大学人文科学研究所，京都．
與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子（編纂・校訂）1926．日本古典全集第一回 本草和名，上・下巻．日本古典全集刊行會，東京．
吉田金彦（編著）2001．語源辞典 植物編．東京堂出版，東京．
吉田忠生・鈴木雅大・吉永一男 2015．日本産海藻目録（2015 年改訂版）．藻類 63: 129–189．
湯浅茂雄 1995．江戸時代の辞書．西崎亨（編）日本古辞書を学ぶ人のために．pp. 223–254．世界思想社，京都．

（2020 年 12 月 23 日受付，2021 年 2 月 3 日受理）
通信担当編集委員：北山 太樹